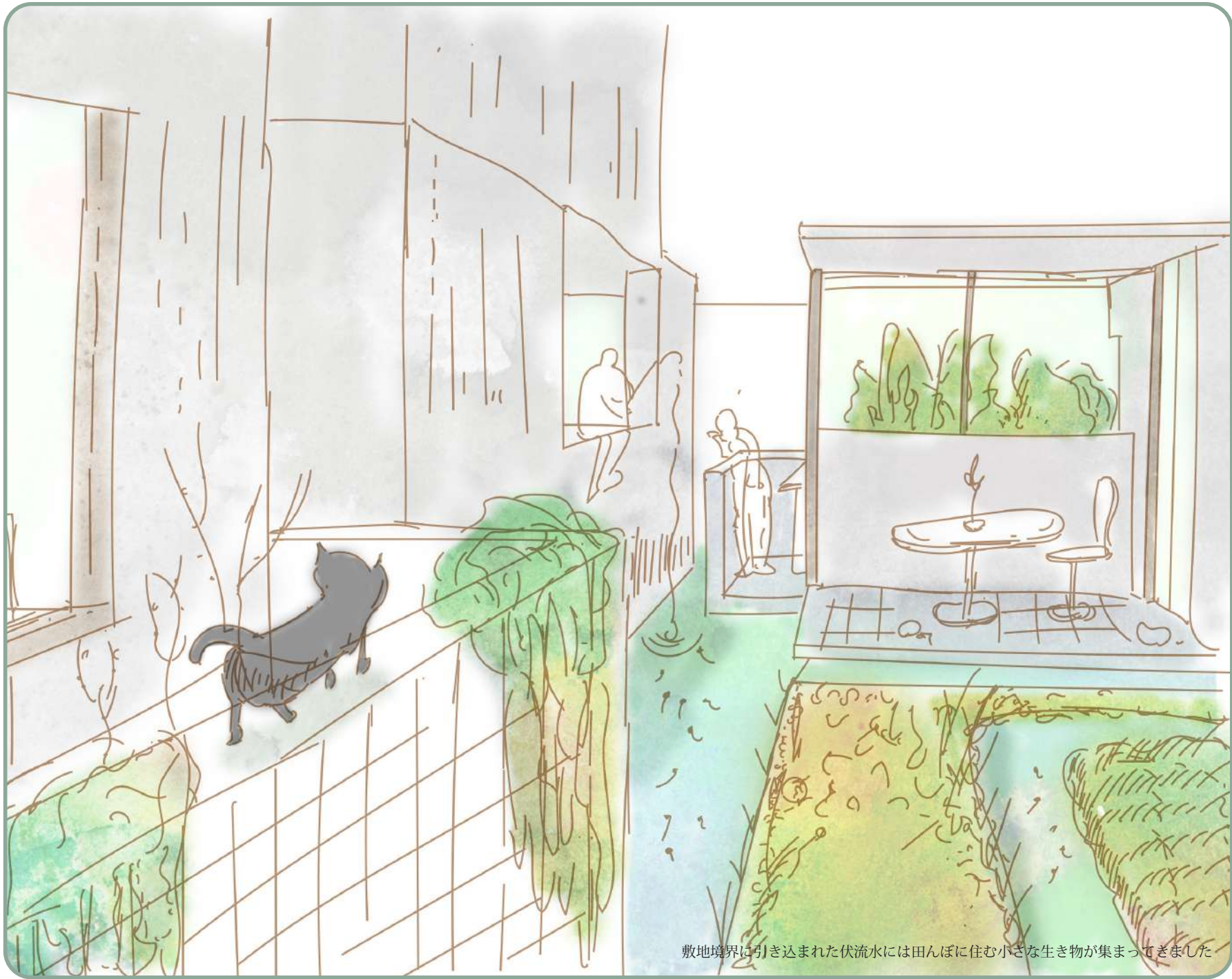
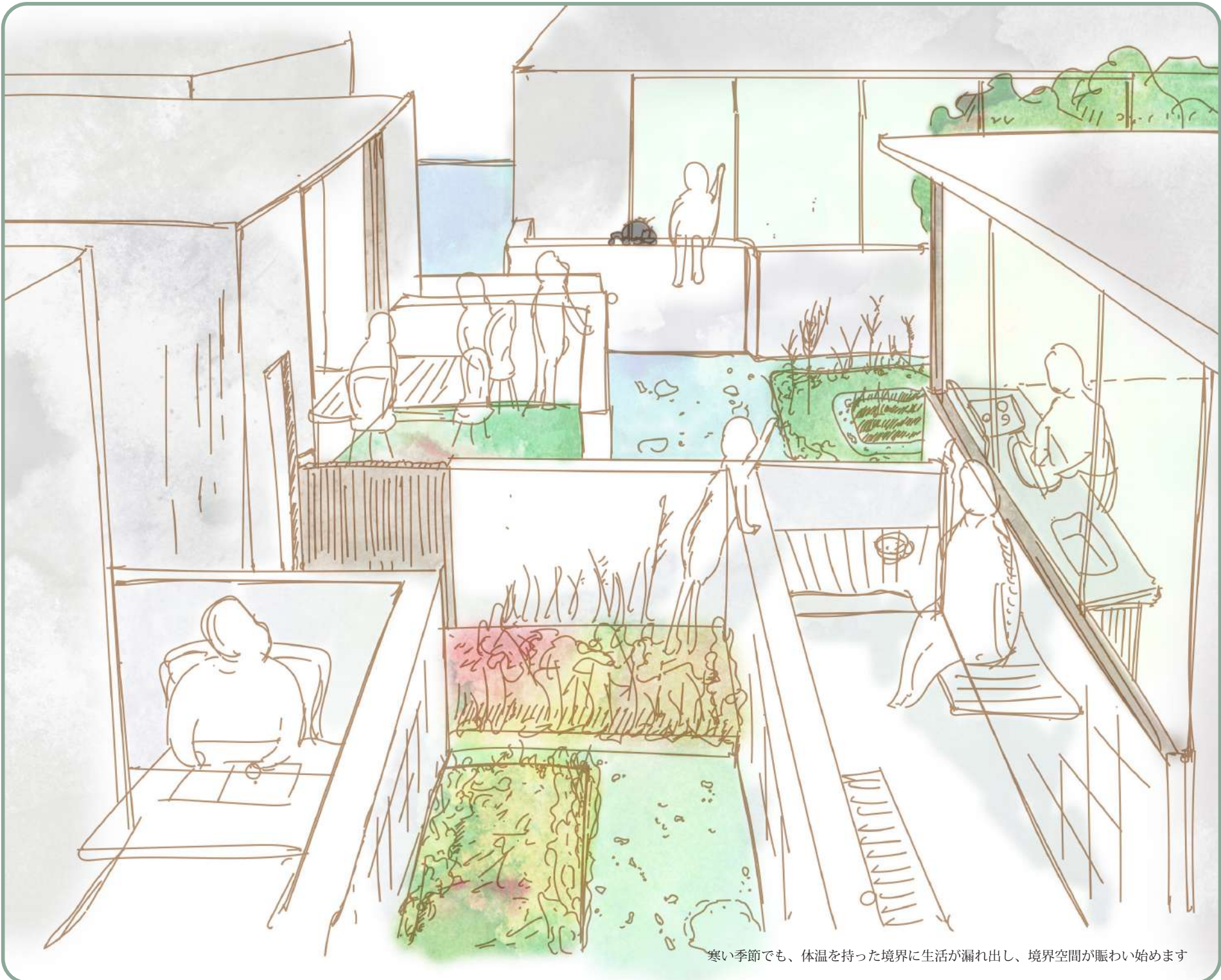
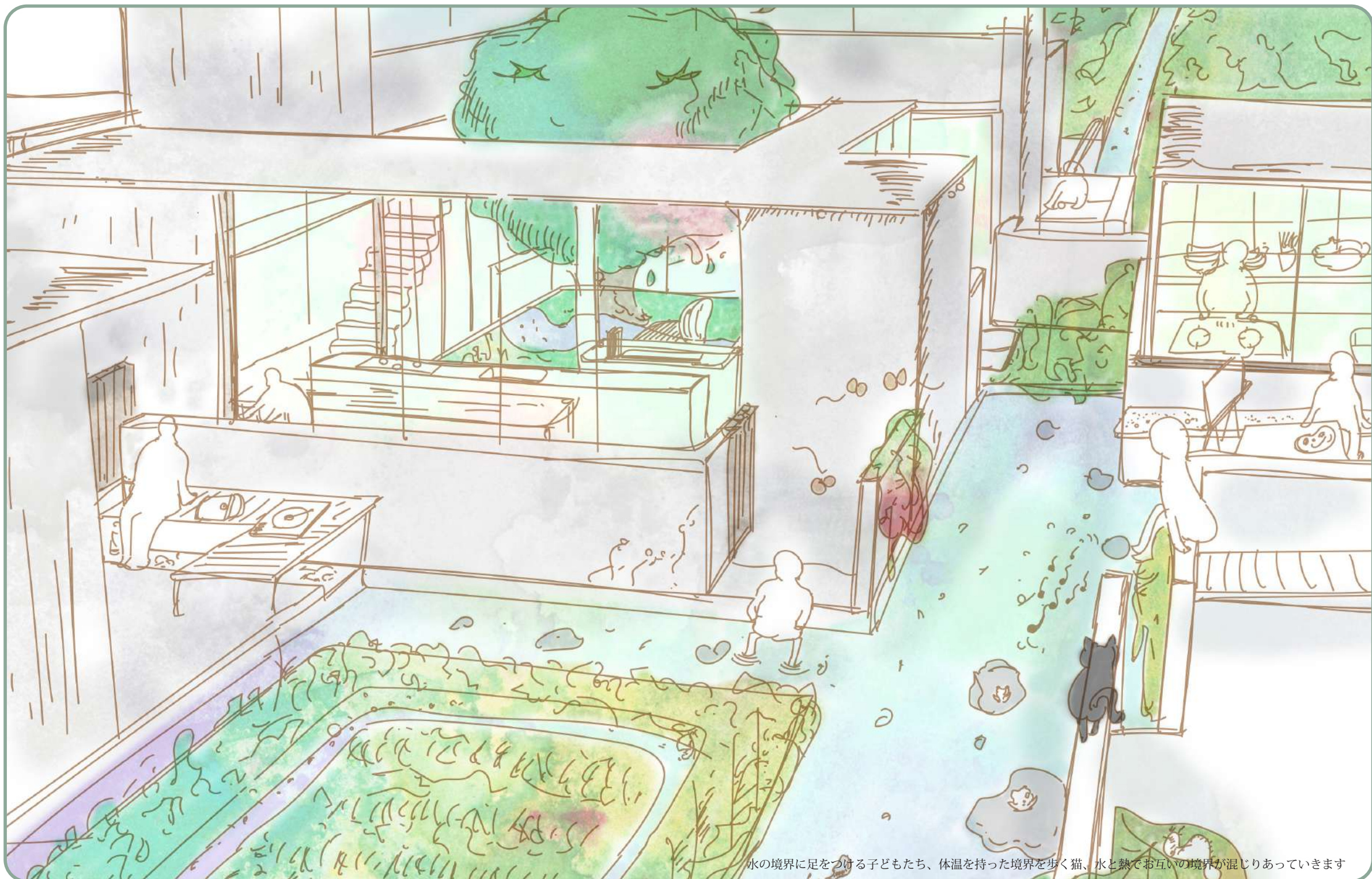


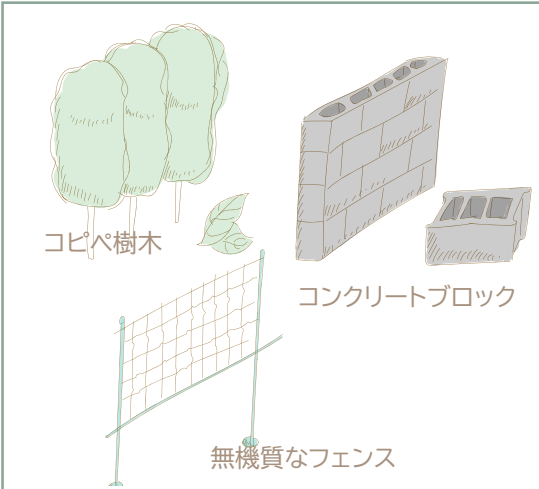


生きた境界をまとう家

建築技術の発展とともに私たちは自分だけが快適な生活を送ろうと、あるときから自然環境や近隣住民をある種の敵とみなし始めた。そして家には境界ではなく、「塀」「樹木」「柵」「壁」といった近寄りたがいの結界を張ってしまったのだ。「生きた境界」、私が提案する境界は風とともに形を変え、生物を宿し、声が聞こえてくる。そして人や動物たちと同じように体温を持つ。そんな「生きた境界」が凝り固まった境界空間をほぐしはじめる――

1-1 背景 「近寄りがたい境界」に溢れた街

私たちが住む街はいつしか「近寄り
がたい境界」に溢れていました。無
表情なブロック塀や、コビレされた
植栽やチープなフェンス、高気密な
分厚い壁と屋根、ここでは「死んだ
境界」と呼ぶことにします。



そんな「死んだ境界」で溢れた街は、人々の繋がりを分断し、子どもたちが家にこもり、スマホに明け暮れる生活を送ることに加担してしまったのです。

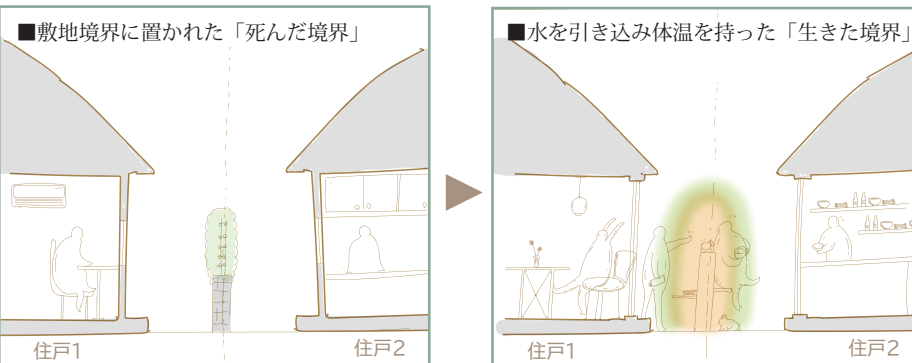
1-2 敷地 龍王山からの伏流水が広がる酒都「西条」



計画敷地は広島県東広島市西条の龍王山の麓にある田んぼです。龍王山に降り注いだ雨が西条層を通して出来た伏流水は西条を酒都へと導きました。そんな水が流れる田んぼが西条には多くありますが、どんどんと太陽光パネルに覆われているのが現状です。

2 提案

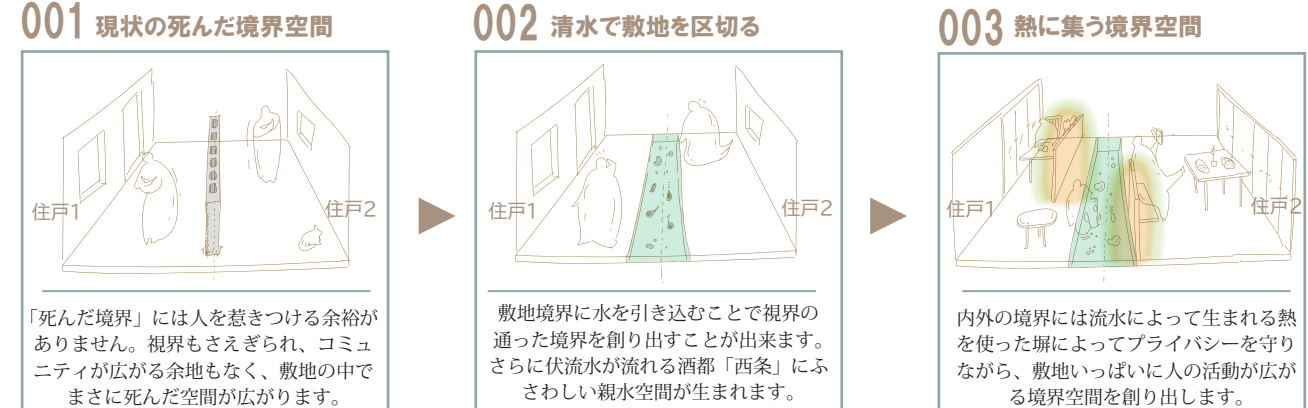
伏流水を引き込んだ「生きた境界」をまとう家



1-1にあるような「死んだ境界」は誰も近づけない結界のようになってしまいます。そこで私は西条の伏流水を使いながら、風と共に形を変え、生物を宿し、人や動物と同じように体温をもつ「生きた境界」をまとう家を提案します。

3 ダイアグラム 「生きた境界」が創り出す「敷地境界」と「内と外の境界」

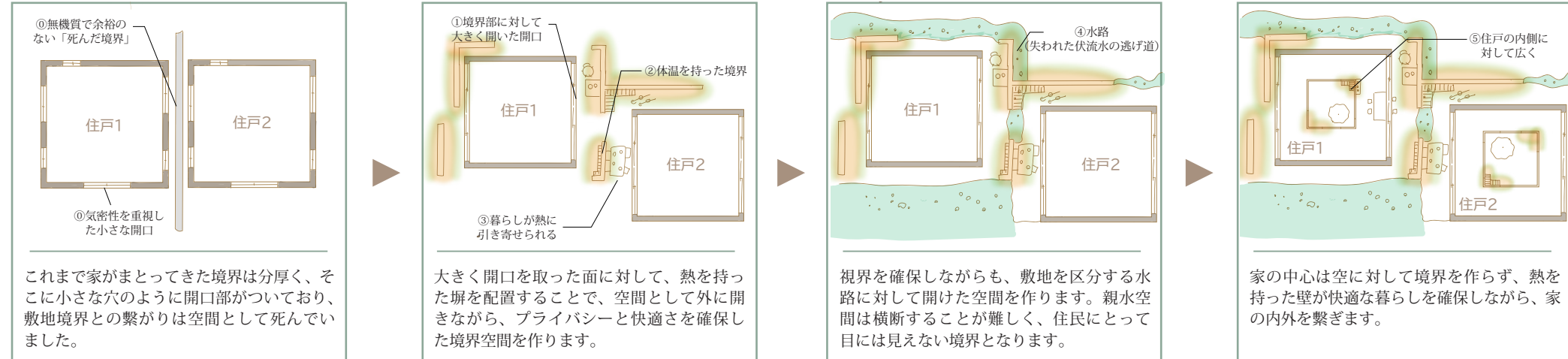
街には敷地を分ける「敷地境界」と建築の壁にあたる「内と外の境界」があります。この２種類の境界に「生きた境界」を取り入れることでこれまで誰も近づけなかった「死んだ境界（＝結界）」が暮らしや街の活気が集うような開けた境界空間になるのです。



4 平面ダイアグラム

「生きた境界」が現代の分厚い壁を解く

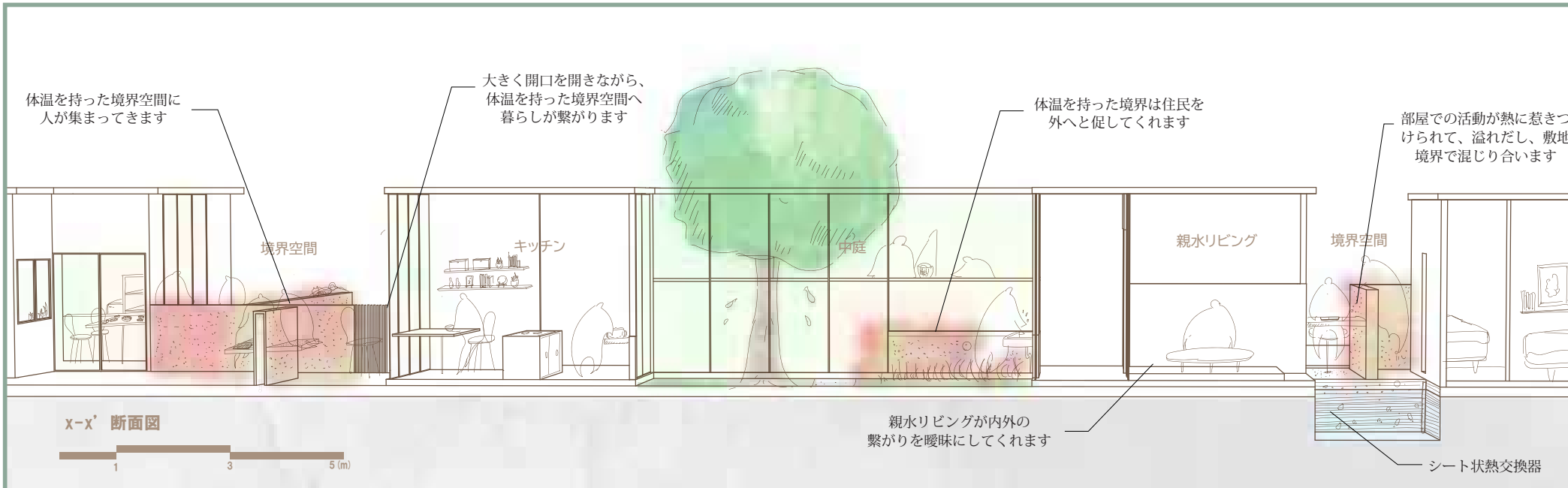
南が多いアジアの中でも、日本は特に冬から春にかけての寒い期間が長いので、閉鎖的な住宅が目立ちます。それは冬の寒さが厳しい西条でも同様です。流水によって生まれる熱を持った「生きた境界」はそんな分厚い壁を解き、境界自体が外と内を繋ぐ架け橋となるのです。\\



5 断面計画

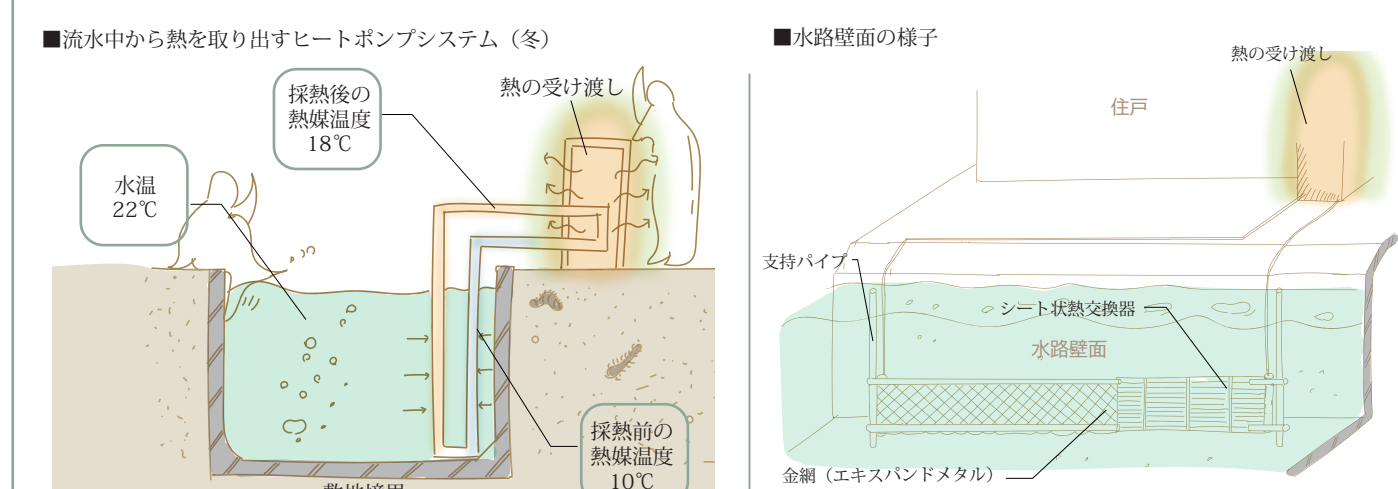
水とそこから生まれる熱が人を惹きつける境界空間を創る

田んぼの水路に流れる伏流水から「シート状熱交換器」を使うことで堀に熱を与えます。夏は冷たく、冬は温かい堀が閉じた家を外に開くとともに、人を惹きつける境界空間を創り出します。



6 システム 水の境界から熱の境界を創る

水路に「シート状熱交換器」を用いることで、視覚的に開けた境界を創る水路に流れる水が同時に境界に体温を持たせることができます。



敷地境界を削り出す水路に「シート状熱交換器」を設置することで、流水から熱を取り出して、扉に熱を与えるシステムを使います。冬の場合、流水から採熱した熱によって温風を扉に送ることで体温を持った扉になります。

7 環境計画

「生きた境界」は失われた伏流水の逃げ道となり、生物の住処となります。



田んぼが失われることで生息していた生物や伏流水の逃げ道がなくなってしまいます。「生きた境界」をまとった街は境界空間を豊かにすると同時に自然との共生も可能にするのです。

8 平面計画 敷地いっぱいに広がる境界空間

「生きた境界」は敷地いっぱいに広がった、開けた暮らしを創り出します。死んだ境界とは違い、閉じこもっていた子どもたちも外に出て、冷たい清水や温かい壁に触れながらのびのび暮らすことができるのです。

